

2017年  
8月27日対中外交の蹉跌  
片山和之著

上海総領事を務めている外交官の著者が、上海を切り口に日中外交史を振り返るユニークな著作。

上海の歴史や日本との関わりをひもとき、かの地に関わった重光葵や松岡洋右ら11人の外交官の軌跡を振り返る。そこから導き出したのは、外交官の信念と勇気、誠実さが持つ大きな意味、情報収集力や人的つな

がりの重要性などだ。そこに問題があったからこそ、対米戦と破局につながったのだと著者は結論づける。

戦前、中国には大使館や総領事館などだけで60以上の拠点があったという。そして今も、企業の拠点数などが世界最多クラス。今も昔も、中国との付き合いが「日本の最大の外交課題」というのも過言ではない。外交の難しさと責任の重さを、改めて思い起させてくれる一冊だ。（日本橋報社、3600円）（佑）

増刷記念  
報道特集2017年  
9月17日

## 新毎日

対中外交の蹉跌 上海と日本人外交官

片山和之著(日本橋報社・3600円)

三十数年の外交官生活で一度にわたり中国に在勤した現役の上海総領事が、これまでの自身の対中外交の歩みや中国外交に携わった歴代外交官の足跡、現在の日中関係についての考察をまとめた。歴代駐中国大使や総領事、年表の資料も収録され中國に勤務した松岡洋右や重光葵といった元外相らに著者は関心を寄せていく。資料を集めて調べ、得られる反省は「(外務省は)専門性や人情的ネットワークを持った陸軍に太刀打ちできず、国民層の理解を得るために努力を欠いた」ことだった。

今の中国について、多層的な分析の取れた研究と調査・分析が必要だと著者は言う。各分野のハード・ソフト両面の日本の先進性や独立性、魅力を世界に示し続け、中国との差別化を図ることが重要だと強調する。上海を拠点にまとめられた提言は傾聴に値する。

(藤)

上海から見た戦前の日中外交史を出版

領土、経済、歴史問題など隣国・中国との外交は、日本にとって大きな課題だが、戦前からの対中外交を「上海」というユニークな視点でまとめた「対中外交の蹉跌 上海と日本人外交官」（日本橋報社）を出版した。

取り上げた外交官は、上海で勤務経験のある松岡洋右、重光葵ら11人で、いずれも戦前を代表する文官エリートたち。彼らの回想録などから浮かぶのは「中国大陸で圧倒的な情報収集力や人的ネットワ

ークを持っていた陸軍（武官エリート）に対抗できず、妥協を重ねる姿」だった。中国を巡り米国と対立が深まり、日米戦争につながっていく。

この失敗を踏まえ「台頭する中国とどういう関係を築くかが重要。包括的で多層的な分析が必要だ」と説く。

上海にある日本総領事館の現役総領事。外務省に入ってから中国勤務は計5回に及ぶ。総領事公邸に現地の大学生を招いて、お茶などを飲みながらの交流も欠かさない。



8月初めに一時帰国  
した片山和之在上海

本国総領事は精力的  
に多くの交流を行なつた。  
片山氏は1960



(962)

『対中外交の蹉跌―上海と日本人外交官』著者、  
在上海日本総領事  
片山和之さん

片山和之さん

年、広島県生まれ。1  
983年、京都大学法  
学部卒業後外務省入  
省、中国課首席事務  
官、在米国大使館参事  
官、在中国大使館経済  
公使、在トロント総  
領事などを経て、20

15年8月在上海総領  
事に就任。中国生活は  
5度目だが、上海は初  
めで、史上最高を記録し  
た。全世界の在外公館  
で発給するレザの3分  
万4000件を超えて  
し、史上最高を記録し  
た。全世界の在外公館  
の1を上海総領事館の  
みで発給している。

また「海総領事館  
の管轄地域（上海市、  
江苏省、浙江省、安徽  
省、江西省）に日本の  
対中投資の8割、対中

貿易の5割、中國内  
者から評価の声が寄せ  
られた。

上海地域と日本の  
関係の深さについて触  
れ、「上海総領事館のビ  
ザ発給件数は175万  
件（2016年）。今  
年1月4日の御用始め  
の申請件数は1日で1  
万4000件を超  
えていた」と語る。

これからの日中関係  
については「経済関係  
は連邦共同体」「国民  
感情によって左右され  
る不安定な関係から、  
共通利益に根ざして冷  
静かつ戦略的なWIN  
-WINの互恵関係  
を」と語り、力強く「戦  
略的互恵関係の推進」  
を訴えた。

冷静かつ戦略的WIN  
-WINの互恵関係を

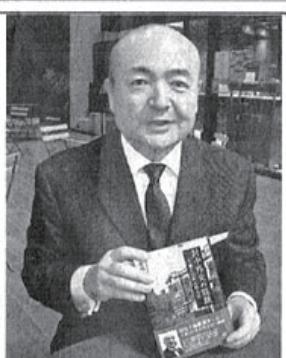
片山氏は新著「対中外交の蹉跌」で、上海と日本外交官11人の足跡をたどり、彼らが果たした役割と限界、そして蹉跌の背景と、現代の日中関係への教訓と

視座を提示。多くの読  
者から評価の声が寄せ  
られた。

（設置中）

日本人外交官たちの著書、訳書の書評特集ページは  
<http://jp.duan.jp/241.html>

ご注文は、全国の書店、アマゾンなどをご利用いただけます。トーハン 日販 その他 取次コード：5752



かたやま  
片山  
和之さん(57)



「好き嫌いは別にして、リ  
アルな中国に触れる必要があ  
る。特に、内向き志向といわ  
れる日本の若者に、中国への  
興味関心を持ってほしい」と  
呼び掛けた。（五味洋治）

2017.8.10

東京新聞

2017年  
8月10日

(( 聞きたい。))

## 片山和之さん



戦前、日本の外交官はなぜ対中外交で軍部に翻弄され、取り返しのつかぬ事態を招いてしまったのか。その「蹉跌」の教訓から、現代人は何を学ぶべきか。

現役の上海総領事である片山和之氏が「上海」の視座から対中外交の近代史を考察した異色の一冊だ。片山氏は「必ずしも軍部が悪玉で外務省が善玉だ、との構図は当てはまらない」と考えている。

(昭和12(1937)年)

## 上海総領事による異色の考察

片山氏はしかし、本質的な問題として、「中国の歴史の流れの方向性を見誤つて、『協調』ではなく『対決』の道を選択してしまった結果、中国をめぐって米国と決定的に対立したこと

ら、相互互恵の戦略的関係を構築していくべき時代になつた」と論じている。

(上海 河崎真澄)

道ではない。評論家の江藤

昭和35年広島県生まれ。京大法卒、58年外務省。中国大使館公使、デトロイト総領事など歴任。平成27年か

## 朝日新聞

2017年11月26日

日本橋報社・3600円  
千葉明著日本橋報社・3600円  
千葉明著

▼現役の上海総領事である片山和之氏が「対中外交の蹉跌」上海と日本人外交官(日本橋報社)で、松岡洋右や重光葵ら上海で勤務した外交官の足跡をたどった。「軍、特に陸軍に翻弄され、あるいは、同調、場合によっては先行させ」した戦前の外交官らの役割と限界、今後のあるべき対中外交について考察を重ねている。3888円。

## 対中外交の蹉跌 上海と日本人外交官

(日本橋報社・3600円+税)



現役上海総領事が見た上海の日本人外交官の軌跡

に朝日新聞記者の黒田礼二が「文芸春秋」誌上に書いた「支那膺懲論(中国を懲らしめよ)」に代表された

一方、軍に異を唱えることが難しい空気が外交官をも込み、中国での情報収集力でも軍部に大きく差をつけられた。「満州事変(昭和6年)から対中外交の実権が軍部に移っていた」ことは、悩ましい史実だ。

このことは現代日本の対中姿勢にもあてはまる。片山氏は、「情緒的な関係か

への「あなごり」や「おごり」が外務省、軍部、国民にもあった」とみる。結局は、「泥沼化を防ぎえなかつた点で、外務省と軍部にそれほど違いがあったようには見えない」という。

一方、軍に異を唱えることが難しい空気が外交官をも込み、中国での情報収集力でも軍部に大きく差をつけられた。「満州事変(昭和6年)から対中外交の実権が軍部に移っていた」ことは、悩ましい史実だ。

淳氏の言葉をひいて、「日本の“中國通”には、中国が“他者”(似て非なる相手)という認識が欠けていた」と書いた。顔たちや皮膚の色も近く、中国文化を色濃く受けた日本からみて、一方的に理想や正義を中国に投影し、期待した反応が得られないとき度は幻滅と失望を感じ、最後はエスカレートする性癖だ。

## 現役外交官が検証する戦前

駐上海総領事をつとめている現役の外交官が、戦前の日本の対中外交を検証したユニークな一冊だ。松岡洋右や重光葵ら上海を舞台に活躍した外交官がたくさん登場する。

日本人外交官たちの  
本のご案内

宮本雄一監修

宮本雄一監修

宮本雄一監修

宮本雄一監修

林祐一著

井出敬二著

富田昌宏著

駐上海総領事をつとめている現役の外交官が、戦前の日本の対中外交を検証したユニークな一冊だ。松岡洋右や重光葵ら上海を舞台に活躍した外交官がたくさん登場する。

十分に獲得できなかったとの指摘は、これからを考えうつえで大切な視点だろう。

## 日本経済新聞

2017年10月28日

日本経済新聞  
翻訳必携  
美しい中国語の手帳の書き方 前編  
千葉明著

千葉明著